

# 暗号の役割

烏啼天駆シリーズ・4

海野十三

青空文庫



## 暗闇の中の声

奇賊うていてんく烏啼天驅と探偵ふくろびようびよう袋猫にら々々の睨にらみ合いも久しいものである。

この勝負は一向かたづかないままに、秋を送り、この冬を迎えた。

ところがここに袋探偵は、一つの手柄をたてた。いや幸運を掴んだといった方がいいかも知れない。というのは、今から三日前の夜、虎ノ門公園地内でのだんまり一幕。

かれ猫々は、その夜すっかり酔っぱらってあそこを通りかかったが、どうにも身体が思うようにならず、そこでしばらく時間をやり過ごすことにして、ふらふらと足を踏みこんだのがあの公園亭のあるところまで行きつかないうちに力が抜けてしまい、どんと尻餅をついてそのままと相成ったのが、入口から入ったすぐのところの八やつ手での葉かけ。

そこですっかり身体が安定してしまつて、ぐっすり睡込んだ。

——と思つたら、たちまち夢を破られた。何者とも知れず、十歩位でとんで行けそうなすぐ傍で左右に分れて睨みあつたる二組の人影。それがあたりを憚はばりつつ凄すこ文もん句くを叩きつけ合う。時々声高になつて言葉に火花が散るとき、かれ袋探偵の酔払つた耳底に、

その文句の一節が切れ切れにとびこむ……

水鉛鉞のすばらしい鉞山が見つかった。

そのかしよう仮称お多福山たふくやまの場所は秘密だ。

おぬしだけが知っているんだ。

とんでもない。

金山源介は殺された——お多福山の宝を見つけて、見本の原鉞を掘りだした男……

殺したのはおぬしだ。

うそだ。でたらめだ。

烏啼の身内と分ったからにや、話はお断りだ。

そんなことはいわない方がいいだろうぜ。笹山鬼二郎、おぬしは悪人だ、卑怯者だ。

もうけ  
儲けは山分けだ。

いやだ。

おぬしの大將に何もかもぶちあけて、大將にかけ合う。

まあ、待て。

おぬしは源介から横どりした秘密地図を持っているんだ。それを今、半分に破いてこつちへ寄越せ。

ちよツ、悪い者に見こまれたよ。じゃあ今出して、それを半分にするから……ちよつと待っていて下さいよ。

その次に起つたことを、袋探偵はわりあいはつきり覚えていて、  
というの、たちまち身近に起つた大乱闘。のし罵る声。悲鳴。怒  
号。殴りつける音。なにかがしきりに投げつけられる音。それか  
ら乱れた足音。遠のく足音。……

袋探偵は、八つ手のおかげで、いくたびとなく立とうと努力した。  
だがそれは遂に駄目であつた。腰が重くて、力がいらなかつた。  
そのうちに何だか机ぐらいの大きさのものがとんで来て、彼を張  
り倒した。彼は温和おとなしくなつた。

やがて彼は気がついた。

身体の方々に、はげしい痛みを感じた。手をちよつとあげても  
痛いし、足をちよつと動かしても痛い。腰のあたりがひりひりす

る。

だがうれしいことに、こんどは二本の足で立上ることができた。ただし彼の背は丸く曲つたままであつた。だがこれは元々彼が猫背のせいなので、なにも今夜に始まつたことではない。

彼は長時間厄介になつた八つ手のしげみから放れようとして、蹴つまずいた。足の先に、ずしりと重いものを突つ掛けた。見ると折鞆が落ちていた。

彼はそれを拾いあげて、常夜灯の下まで持つていつて改めた。このとき彼の眼は、もう酔眼ではなかつたが、全く見覚えのない鞆であつた。彼はその鞆を元の場所へ置くために引返したが、五足六足行つたところで気が變つた。

彼はその鞆を小脇に抱えこんで、公園の木立の闇をくぐり、外の街路へ出た。

それから彼は無事に自分の事務所へ戻りついた。

戸をあけて玄関にはいると——彼だけが知っている暗号錠の動かし方によつて、彼はこの戸じまり嚴重な屋内へはいることが出来るのであつた——忠実なばあやせき関さんが起きて来て出迎えた。

午前二時をすこし廻つていた。かくべつ用はないから、ばあやさんには自分の寢室へ引取つて貰つて、彼もまた自分のベットを探しあてて、中へもぐりこんだ。

袋猫々は何も知らなかつたが、彼が公園を出たあと三十分ほど経つて、三人の男がこの公園の中へ駆けこんで来た。そしてさつ

きの格闘のあとの地面の上を嗅ぐ<sup>か</sup>ようにして、しきりに何かを探し始めた。

彼らは一時間ほど探してから、三人鳩<sup>きゅうしゅ</sup>首<sup>しゅ</sup>して首をかしげ、晴れない顔付のまま公園から出ていった。

当夜、袋探偵が拾った折鞆は、烏啼天駆の義弟の碇<sup>いかり</sup>健二の鞆だった。その中には烏啼にとって非常に重要機密なる書類もいくつかはいついていて、あの翌朝、袋探偵をたいへん喜ばせたものである。彼はその書類だけを鞆から抜きだして、彼が最も信頼するところの書斎の壁にはめつけの金庫の中にしまった。鞆の方は、硝<sup>ガ</sup>子戸<sup>ラス</sup>棚の中に入れて、鍵をかけてしまった。

彼は、烏啼に対しては、全然知らない顔でいることにした。し

かし定めし向こうでは氣に病やんでいることと思われた。

## 念入りなスリ

袋探偵は、烏啼に関係ある例の鞆のことをしばらく忘れていた。そのわけは、彼が過日八つ手のしげみの間の中で酔耳すいじ（というものがあるとして）を通して聞いた奇怪な事実の研究に没頭していたからだ。

その結果、あの貴重な水鉛鉱の話が本物であることを確めた。

またそれを発見した真の権利者である金山源介が死んでいることも確めた。彼は悪い酒を飲んだあとで下宿で死んだことになっていて、確かに殺害されたことにはなっていないかった。

笹山鬼二郎という人物も確かに実在していた。彼は弓削組に属して請負い仕事をやっている三十男であった。しかし彼はこのところ弓削組へ顔を出さないことが分った。

笹山鬼二郎の宿所へ行つて調べてみると、彼はこの数日以来そこにも全く姿を見せないことが分った。どこか他の場所に泊っているらしい。

そしてこの男の所在を、弓削組でもどうやら気にしていることが判明したが、それとは別に、烏啼の一派が弓削組以上に、鬼二

郎の所在を知りたがって、いろいろと手を廻していることが分つた。そして首領の烏啼天駆自身はまだ顔を出していないが、彼の義弟である腕きき男の碇健二などは、いくどもこの鬼二郎の家へやつて来たことが、近所の人々の話から分つた。

笹山鬼二郎は相当の悪党でもあり、頭脳も腕も胆力も衆にすぐれているらしく、この前の虎の門公園の<sup>であい</sup>出会においても、遂にあの秘密地図の半分を相手に渡さないでしまったことは確實だった。そのとき彼は反つて逆襲に出で、烏啼組に一泡も二泡もふかせたらしい。現にその夜の烏啼組のリーダーだった碇健二さえ右腕を引裂かれた上に昏倒<sup>こんとう</sup>してしまい、部下の者たちは周章<sup>あわ</sup>てて彼を肩に引担いで後退したほどだった。

そういう鬼二郎のことだから、早くも形勢をさとして行方をくらましたのであろうが、袋猫々にとつても彼鬼二郎の所在は一刻も早く突きとめたく、その上で鬼二郎が金山源介を本当に殺害して彼の利権を横領したものだかどうかを確める意欲に燃えあがっていた。

だが、猫々探偵の念入りな捜査にもかかわらず、今なお鬼二郎の所在を掴むことの出来ないことにおいては、碇健二の場合と同じであった。

ただ数日後の或る日、彼に思いがけない一つの収穫があつた。

それは彼探偵が例の仕事を胸に畳んで虎の門公園の脇を通行中、公園の中からいきなりスポンジ・ボールがとんで来て探偵の頭に

強く当たった。探偵はふらふらとなった。そのとき若い男が公園の中からとび出して来て、ボールを拾う恰好をしながら、探偵にどしんとぶつかつた。「すみません」と若い男は詫びて走り去ろうとするのを探偵は相手の腕をつかんで手許へ引張つた。

「掏摸<sup>すり</sup>だな。掏<sup>す</sup>つたものを返せ」

と探偵は怒鳴つた。相手は強力をもつて暴れた。が、袋探偵は腕力にかけてはちよいと自慢するだけあつて、若い男の腕首を放さない。そして内ポケットから持つていった紙幣<sup>さつひ</sup>入れを取戻そうと争つていると、いきなり相手が探偵の手に噛みついた。

「痛ツ！」

探偵は手を放す。ごつんと向<sup>むこう</sup>脛<sup>すね</sup>を一撃される。探偵はひっ

くりかえる。と、横面をガーンと靴で蹴あげられ、探偵は気が遠くなつてふらツとなつた。

ここまでは探偵のあざやかな負けだった。が、彼が気を持ち直して、<sup>あご</sup>頤のところをおさえて立上つたとき、下へぱらりと落ちたものがある。封の破れている手紙だった。それが収獲物だったのだ。

さすがに探偵で、普通の者なら一顧もしないものを、彼はポケットへねじこみ、それから公園へ躍りこんだ。それはさっきの男を捕えるためだった。だが公園の中はひっそりかんとしていて、野球やキャッチボールをしている者はない。探偵は齒がみをしたが、どうにもならなかった。

が、後で彼は例の封の破れた手紙をポケットから出して拵げてみたところ、これは彼を昂奮させずには置かなかつた。すなわち一枚の紙に書かれた全部は、ことごと悉く片仮名ばかりの文章であり、一度読み下してみると、それが正に暗号文であることがはっきり分つたのである。

その文章は、次の通りであつた。

「クルマカンニセンコクアリシンネンノエンカイイマナオエンキザンネンナリタンネンベルクカイセンノケツカハシゼンチホウミンノシンノバンサンカイインニカンセズナオミンカンニソノサンカンヲコワントカンゼシナランイマケエイツノソサマジニクギジアマトンツマイセリンコゴラミウイヲダイハモラチチノトレマカ

テギヲチマメチイモシウトトウミケシテモアエゲイコリマヨトス  
カイルウヨレオインンウハノナオナスヲトレツコタデレスハ」

## 解読できるか

明らかに、これは暗号だ。

暗号である以上、解けるはずだ。

「よろしい。解いてやるぞ」

袋探偵は自分の机の上に、例の片仮名ばかりの一文をのせて、

はげしい決意を示した。

「どこから手をつけたらいいか……」

二度読みかえし、三度くりかえし、四度五度と声をだして読んだ。

読みかえしているうちに、何となく気のついたことがある。

「始めの方は何だか意味のある言葉が続いているが、途中からちんぷんかんぷんに変ってしまふ」

それからもう一つ、感想を持った。

「前半は、いやにぴんぴん響くのに、後半になるとそれがなくなっている」

それ位にして、あとは正攻法に移る。

まず字数を算<sup>かぞ</sup>えてみる。

「ほう、二百字ある。ちょうど二百字だ」

きちんと二百字だということは、偶然であるとは思われない。何か作為が秘められているのだ。

次に、この二百字を分類して見る。どの字が最も多いか、多い順に字を並べてみるがいいだろう。

その結果、次のことが分った。

ン（二十九個）が第一位だ。次はイ（十四個）だ。第三位はカ（十一個）だ。

それからは、ノ（八個）、マ（九個）、ト（七個）あとはずつと数が少くなっている。

「これはどうもおかしい。たった二百字の暗号文にしろ、日本文字の使用頻度の統計とだいぶん違っている。ヲ、ニ、ワ、ルなど相当多くなければならぬ筈の文字がこれには意外に少い。——それに反して、ンだとかカだとかいう文字が多すぎる。ことにンが二百字中に二十九字もあるのは、あまりに変態である」

そこで袋探偵は、溜息を、一つついて鉛筆を取上げ、文字の第一番から一つ一つ数え始める。

「ここまでちょうど半分だ。これより前が百字。あとが百字。——こうして境界線を入れてみると、いよいよこれは何かあるな」  
クルマカンから始まってカンゼシナランまでと、次のイマケエイツから始まってタデレスハマまでとに分けてみたのだ。

「ふうん。前半と後半とは、まるで他人のようだ。——そこでこれを仮りに別物としてみよう。そして分析してみる」

まず前半からだ。出て来る文字の頻度をかぞえてみる。

ン（二十五個）、次はカ（九個）、次はイ（五個）、ノ（五個）、シとナが共に（四個）だ……

「これはいよいよ無茶苦茶だ。日本文字頻度統計をすっかり破っている。——そこで、これは意味のある言葉を分解して配列がえをやったのではないということが分る。してみれば、これは一体何だ。どんな役柄なのか、前半の百字は……」

「とにかくンの二十五個は、あまりにも異常だ。次のカは九個だ。第一位と第二位とのひらきが、あまりに大きい。……ンの二十五

個か。二十五だ。……待てよ、二十五といえば百の四分の一だ。前半の前字の数は百だった。その四分の一がンという文字なんだ。そこだ。そこに鍵があるんだ」

なんの鍵であろうか。

ちよつと取付けない。——それならば、すこし方向をかえてみる。

百と二十五。とにかく百だ。百と二十五と四だともいえる。

この三つの数字の関係がとければいいのだが……

「そうだ。四と百と——これかもしれない。百個の文字を十字ずつ切つて並べると十行で百字となる。すると四角が出来る。これはおもしろいではないか」

クルマカンニセンコク  
アリシンネンノエンカ  
イイマナオエンキザン  
ネンナリタンネンベル  
クカイセンノケツカハ  
シゼンチホウミンノシ  
ンノバンサンカイイン  
ニカンセズナオミンカ  
ンニソノサンカンヲコ  
ワントカンゼシナラン







黒丸がンの字だ。

「それを句読点とする。すると始めの文字から拾って行って、四字・二字・五字・一字・二字・七字・二字・一字……待てよ、これは駄目だ。こうして勘定していくと、内容文字は七十五字となる。句読点が二十五だから、これを百字から引いて七十五字だ。……七十五字ではおかしい。……後半の百字がどうやら暗号内容文だと思われるんだがそれは百字ある。七十五字ではない。するとこのンを句読点とする考えは駄目だ」

ではどう解くのか。

もう一度元へ戻って、百と二十五と四だ。百は全字数。二十五

はンの字数、四は……四は四角だ。二十五掛ける四は百だ。

「ンのある場所を拾ってみると、第五字、第八字、第十四字、第十六字、第十九字、第二十七字、第三十字……となる。試みに、その番号に相当する文字を、後半の百文字の中から拾ってみよう。

すると第五字（イ）、第八字（ソ）第十四字（ギ）、第十六字（ア）、第十九字（ン）、第二十七字（ゴ）、第三十字（ウ）……であるから、この順に文字を拾ってみると——イソギアンゴウ——イソギアンゴウ——“急ぎ暗号”かなよろしい。もつと先を拾ってみよう。

「第三十二字（ヲ）、第三十六字（モ）、第三十八字（チ）、第四十五字（テ）、第五十三字（モ）、第五十八字（ウ）、第六十

一字（シ）、第六十四字（ア）、第六十六字（ゲ）、第七十字（マ）、第七十三字（ス）——ヲモチテモウシアゲマス。始めからだと「急ぎ暗号をもちて申上げます」となる、これだ。

後半の文字の中から、ソの文字の個所にあたる文字を拾えば、暗号は解けるのだ。よし分った。それなら先をつづけよう。

「『急ぎ暗号をもちて申上げます例の男は』——ここまでで二十一字となる。これだけでは文章が尻切れ蜻蛉だ。その先はどこに隠れているのだろう。」

もつと暗号文は永く続いているのではあるまいか。用箋の第二枚、第三枚があるのではなかったか。しかし封筒の中にはいつていたのは用箋一枚きりだった。困った」

袋探偵は行詰って、紙片をいまいましく眺める。

もうすこしで解けるような気がする。それでいて、手掛かりが見つからない。脳髓がちよつとすねているらしい。

どうしてやろうか。

袋探偵は呻<sup>うな</sup>っている……がそのとき彼は声をあげた。

「あ、これかな」探偵は白黒表の最後のところのンを指す。第百字目のンだ。「四角の枠の隅っこにンの字があるのはこれだけだ。他の三つの隅にはンがない。……するとこの窓はうまく明けてあるのかもしれない。……あつそうだ。四角だ。正方形だ、十字ずつの正方形だ。横にしても、さかさにしても同じ形の同じ大きさだから、ぴたりと重なる。よろしい。きつとこれだ。後半の百字

を、同じように四角に並べてみよう」

いまけえいつのそさま

じにくぎじあまとんつ

まいせりんこごらみう

いをだいはもちちちの

とれまかてぎをちまめ

ちいもしうととうみけ

してもあえげいこりま

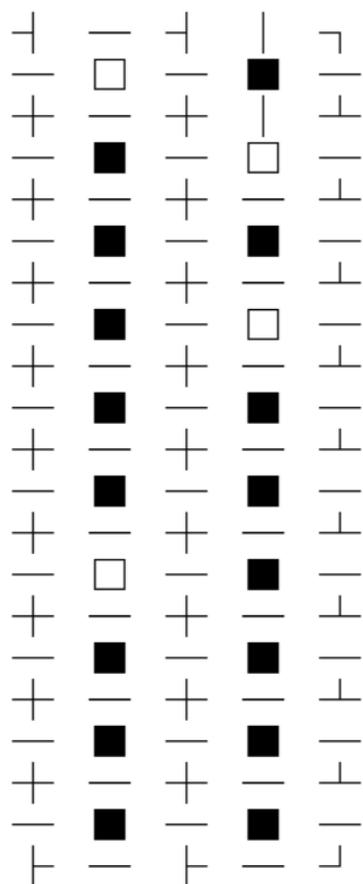
よとすかいるうよれお

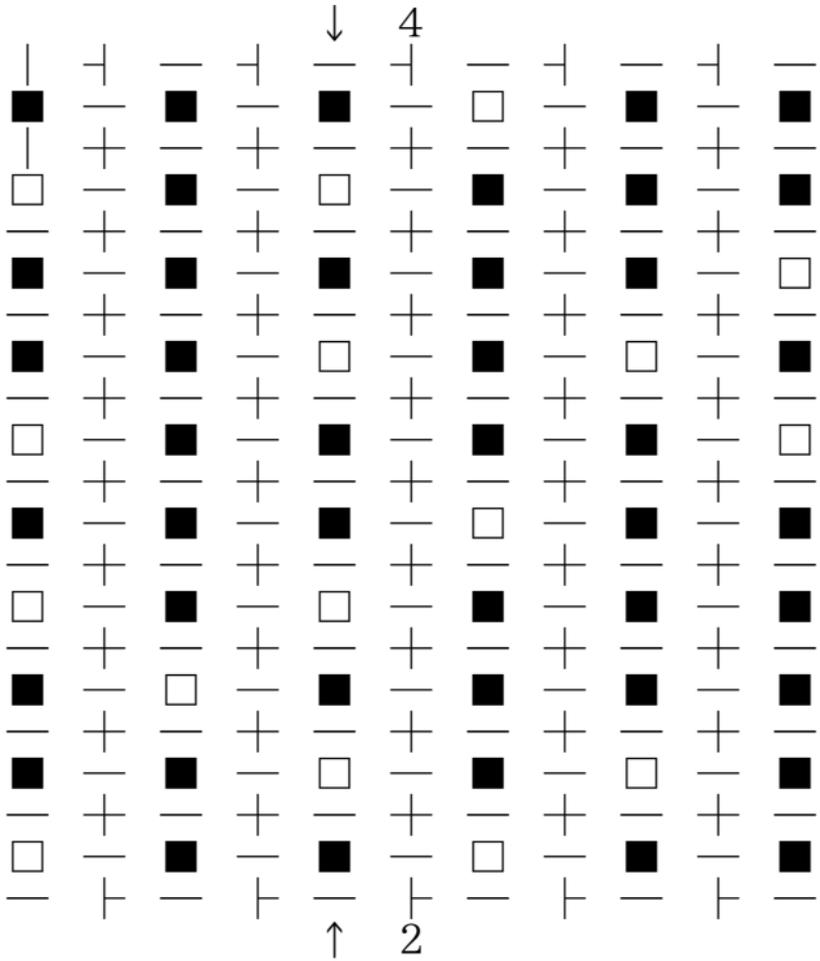
いんんうはのなおなす

をとれつこたでれすは

こうしておいて、前半の文字を四角に並べた白黒表をこの上に重ねる。ンのところ——つまり黒丸のところだけをナイフで穴をあけておく。ここに出してあるような形だ。

3  
←







それはまず窓あき紙の（１）なる向きに置いたのを、次は（２）なる向きに変える。つまり左へ九十度廻すのである。すると、

“前島セン一と偽名し富子という女を連れ”と文章の切れつ端が出てくる。

次はまた左へ九十度廻して（３）なる向きで文字を拾いその次にまた廻して（４）なる向きで字を拾う。これで百字の暗号が、きちんと文字になった。すなわち、全文を読むと、

“急ぎ暗号をもちて申上げます。例の男は前島セン一と偽名し、富子という女を連れ、一昨日以来、原の町ともえ旅館離れ竹の間に泊りこみ誰かを待受けている様子です”

となる。

「ははあ、例の男というのは笹山鬼二郎のことだな」

袋探偵は直感した。

今日の掏摸すりが只の掏摸でなかったことは、彼奴の用いた念入りな手から察しがつく。烏啼の一味か、或いは笹山の一派かと考えたが、この暗号文から推測すると、どうしてもこれは烏啼の部下から本部又は碇健二へ送った情報に違いない。

「そうか。こういう暗号文を手に入れたからには、わしは原の町へ至急出張せんけりやならん定石だ」

彼は急遽きゆうきよ自動車を操縦して外出した。

## 記録すべき応対

表に張り込んでいた烏啼の部下は、その都度本部へ報告を送つた。

“袋猫々が、周章あわてて自動車で外出しました”

“上野広小路で買物をしました。旅行鞆を買い、食料品を買い、トランプを買いました”

“上野駅で、原の町行きの二等切符を買いました”

“駅前の本屋へ寄りました。サトウ・ハチローの詩集と旅行案内とを買いました”

“駅前の喫茶店で、紅茶一つ、アンミツ一つをたべました。十円チップを置きました”

“袋探偵は午後三時帰宅しました。窓から覗のぞいてみると、彼は旅行の準備をしています”

“取調べたところ、袋探偵の買った切符は午後十時上野発の青森行急行であります”

“只今午後九時十七分です。袋猫々は玄関前に現われ、旅行鞆と毛布とを自動車に積みこみ、助手席に少年を一人のせてばあやに見送られて、自動車を自ら運転して出かけました。方向は上野のようであります”

“中折帽に長い茶色のオーバー、猫背で、茶色の色眼鏡をかけた

袋猫々は、黒い旅行鞆と灰色の毛布をもって四番線の九六列車に乗込みました。列車は午後十時一分発車しました。袋猫々はしきりに林檎りんごをかじりながら、本を読んでいます”

”只午後十時十分、少年が、猫々の自動車を運転して袋邸に戻って来ました。ばあやが起きて来ました。自動車はガレージに入れて錠をかけました。少年は、ばあやからチョコレートチョコレートの箱と林檎を三つもらって、喜んで帰って行きました”

”ばあやの部屋の電灯も消え、邸内の窓は全部まっくらになりました。街灯と門灯だけが光っています”

報告は、櫛くしの歯をひくように、烏啼天駆のところへ集ってくる。しばらくして大宮駅から報告があつて、袋探偵は座席で毛布に

くるまって寝入っていると知らせて来た。

「よかろう。猫々め、暗号文に釣られて、とうとう福島県へ追払われやがった。さあそこで、こっちはそろそろ仕事にかかろう」  
烏啼は盃を下におくと、のっそり立上って、碓健二をはじめ部下に目くばせした。

一門の出陣であった。

自動車の中で、碓健二が烏啼天駆に話しかけた。

「あの袋猫々は、暗号文をちゃんと解いたようですね」

「原の町駅行きの切符を買ったところを見ると、暗号文が解けたんだな、そうだろう、探偵商売だから、それ位のことはやれるさ」

「あの暗号文をこしらえた須田は、それを袋探偵が解く力がある

だろうかと心配していたですよ」

「須田よりは、猫々の方がちつと上だよ」

「しかし袋猫々も、まさか自分が旅行に出た留守に、自分の巢を荒されるとは気がついていないでしょうね」

「汽車に乗ってごつとんごつとんと東京を離れていったところをみると、気がついていないようだよ」

「あとでおどろくでしょうな。折角手に入れた烏啼の重要書類が、自分の留守になくなっていたんではね」

「しかし、うまく行きやいいが……袋猫々の金庫は嚴重なことで、玄人の間にや有名だからな」

烏啼はいつになく心配顔で元気がない。

しかし自動車が袋邸の近くで停り、さつと下りたときの烏啼は、鬼神もさける体ていの颯さつ爽そうたる首領ぶりだった。

「中へ踏み込む人員は、おれと碇と、それから豹太、沙朗、八万の五名だ。あとの者は、手筈てはずに従つて外に散らばつて油断なく見張つていろ」

中へ踏みこむことを指名された部下たちは得意満面、にやりと笑つた。

表と裏とから二手に分れて入つた。烏啼の眼の前には戸締りなんか無いも同然だ。

「ばあやをひつくくつて、押入の中へ入れちまいました、そのほかに誰も居りません」

「そうか。じゃあ金庫部屋へ踏みこめ」

袋猫々の書齋に、その秘密金庫はあつた。見事な壁掛をはずすと、その下に金庫の扉が見えていた。

しかしこれが仲々明かないのであつた。

烏啼は金庫破りの三名人の豹太、沙朗、八万に命じて、この仕事に掛からせた。

だがさすがの名人たちも、一時間たち、二時間たつたがどうすることも出来なかつた。

「爆破しますか」

錠健二が、しびれを切らせていった。

「そういう不作法なことは、おれは嫌きれえだ。あくまで錠前を外

して開くんだ」

烏啼は頑として彼特有の我を通す。

三時間、三時間半……三名人の顔に疲労の色が浮かぶ。

「まだかね」

碓が、たまりかねて声をかけた。

「兄貴、黙っていてくんねえ」

叱られた。

「なるほど。こんなに時間がかかるようじゃ、探偵を泊りがけで追払わなければならぬわけだ」

碓は、退屈のあまり机の引出をあけたり、本を一冊ずつ手に取って開いたりした。

戸棚から、先日彼の失った鞆を見つけたときは、はつと緊張したが、中をあけてみると肝腎かんじんの重要書類がない。何のことだ。やっぱり金庫の中か。

四時間二十分という途方もない長時間の記録を樹たてて、午前三時に、遂に大金庫は開いた。

「やれ、あいたか」

「あとは首領にやって頂きます」

三人は精根を使い果してそこへしやがんでしまった。替って烏啼と碇とが前へ出て、金庫の中を覗きこんだ。

「あッ、あれだ」

「うん、やっぱりここに入れてあった。あけられるとは知らず、

馬鹿な猫々だ」

「動くな、撃つぞ。機関銃弾が好きな奴は動いてもよろしい」

たいかつ大喝した者がある。突然うしろで……

「しずかに手をあげてもらいましょう。これは皆さん。ようこそ御来邸下すつた……」

五名の賊は、もろて双手を高くあげてうしろをふりかえつた。機関銃を構えて猫背の肥満漢が茶色の大きな眼鏡をかけて、人をばかにしたような顔で、にこついていた。

「ちえツ、きさまは猫々か、いっぱい喰わしたな」

烏啼は無念のあまり舌打ちをした。

「折<sup>せつかく</sup>角御来邸の案内状を頂いたのに、留守をしては申訳な

いからね」

「途中から引返したのか」

「とんでもない。拙者は原の町行きの切符を買っただけのことでいじわる」

「でも、確かに袋探偵は玄関から旅行鞆と毛布を持って出かけていったが……」

と碇が不審の思い入れだ。

「ははあ、あれは拙者のふきかえ紳士でな、日当千円のものいりじゃ。後で君の方へ請求書を廻すことにしよう」

「おい猫々先生。どうするつもりか。いつまでわれわれに手をあげさせて置くんだ」

「いや、もうすぐだ。警察隊がやがて来る。もう五六分すれば……」

「五六分すれば……」

烏啼の目がぎりりと光って碇へ。

と、高くさしあげた碇の手の中で、ぴしんと硝子のこわれる音がして、破片が床にこぼれ落ちた。

「何だ。何をした」

と、袋探偵は銃口を碇の方へ向ける。そのとき碇が蒼白になって昏倒した。と、その隣にいた烏啼もばったり倒れた。

「どうした……」

言葉半ばに、探偵の臉は重くなり、抱えていた機銃をごとんと

足許へ取落とした。が続いてその機銃の上へ、彼の身体が転がった。

三人の金庫破りの名人たちも、ばたばたと倒れてしまった。みんな死んだ。いや人事不省かも知れない。そしてこれは僅わずか数秒間の出来事であった。一体何事が起つたのであろうか。そのとき、どやどやと足音がして雪崩なだれこんで来た十数名の男たち。彼らは申し合わせたように防毒面をつけていた。

そして烏啼以下五名の賊徒を引担ぐと、踵きびすをかえして急いで部屋を出ていった。

あとに袋猫々ただひとりが、森閑とした部屋に取残された。烏啼の館では慰勞の夜宴が開かれた。

「あのポンスケ探偵も、今頃はさぞおどろいているでしょうね」  
「ふふん、まさか毒瓦斯ガスで呉越同舟の無理心中をやらかすとは気がつかなかったろう」

碓が掌の中で壊した硝子のアンプルの中には、無臭の麻痺瓦斯が入っていたのである。

「烏啼組じやなきや見られない奇略ですね」

「なあに、大したことはない」

「われわれを一ぱい喰わしたつもりが、まんまと重要書類をさらって行かれて袋猫々先生、さぞやさぞなげいでいるでしょうね」

「袋探偵も、もつと自分の下に人員を殖やさないと、こんな目にあい続けるだろう」

「人件費が高くつくので、人が雇えないのでしよう」

それは本当だった。しかし袋探偵としては、既に烏啼の重要書類を写真にうつしたものを握っているので、烏啼の部下があざ笑っているほど歎いてはいない。

水鉛鋌の一件は、その後どうなったのか、話を聞いていない。

# 青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第12巻 超人間X号」三一書房

1990（平成2）年8月15日第1版第1刷発行

初出：「仮面」

1948（昭和23）年2月号

入力：tatsuki

校正：原田頌子

2001年12月29日公開

2011年2月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 暗号の役割

## 烏啼天駟シリーズ・4

2020年 7月13日 初版

### 奥付

発行 青空文庫  
著者 海野十三  
URL <http://www.aozora.gr.jp/>  
E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)  
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU  
URL <http://aozora.xisang.top/>  
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

#### Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>